

史料紹介 「文化二年春帰国紀行」

崎山 健文

はじめに

黎明館所蔵玉里島津家資料中に「御歌書類三箱之内」と貼紙のある箱が二箱ある。中に収められている資料は、九代藩主島津斉宣の歌道関係資料である。本稿では、この中から斉宣作「文化二年春帰国紀行」を底本とし、翻刻・紹介する。

一 島津斉宣の略歴

島津斉宣は、八代藩主重豪の長男として、安永二（一七七三）年十二月六日、江戸に生まれた。この約半年前、同じく重豪の三女として鹿兒島に生まれたのが、のちに十一代將軍徳川家斉の御台所となる茂姫（篤姫・寔子・広大院）であり、斉宣は弟にあたる。茂姫が御台所となるに先立ち、天明七（一七八七）年正月二十九日、父重豪は隠居し、斉宣が襲封した。しかし、十五歳の若さであつたために、寛政四（一七九二）年まで重豪の介助を受けることとなつた。薩摩藩は、近世初頭から慢性的な赤字を抱えており、重豪の代にも儉約令等を始めとして様々な方策が執られたが、十分な効果は得られなかつた。斉宣の代にはさらに逼迫の度合いを強めており、文化二（一八〇五）年十二月、斉宣は「亀鶴問答」を著し、家老等に対して財政再建の決意を示すと、翌三年から「近思録」を重んじる榑山久言・秩父季保らを積極的に登用し、改革を開始した。しかし、急激な改革は藩内に軋轢を生み、また、これを自らの政策否定と

捉えた重豪は激怒し、同五年、近思録党に類する者に処罰を加え、翌六年、斉宣は隠居に追い込まれた。

隠居後の斉宣は、文化十一年に芝から白金へ移居し、天保六（一八三五）年に一時帰国するものの、基本的に江戸に住み続けた。また、文化十四年には総髪して溪山と号した。天保十二年、江戸で六十九年の生涯を閉じている。

二 斉宣と歌道

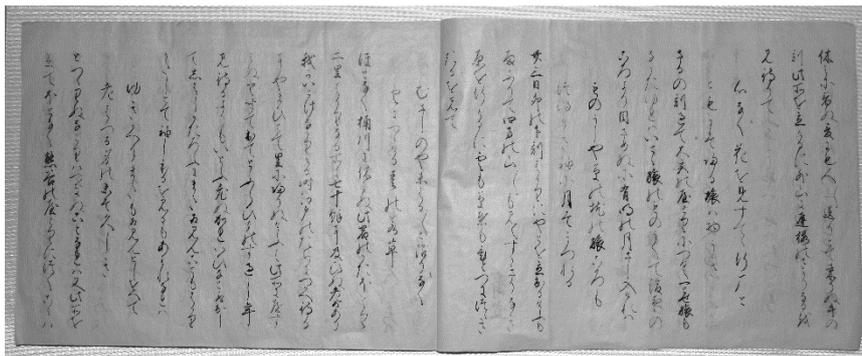
島津斉宣の和歌活動については、いろは歌の制作、神社仏閣への和歌奉納、「松操和歌集」編纂への関与の可能性等を取り上げ、鈴木彰氏がわかりやすくまとめられているので、まずはこれを参照されたい（「島津斉宣と斉興、その藩主としての祈り〈重豪の時代〉の再定位に向けて」（黎明館企画特別展『島津重豪』図録、二〇一三）。同氏は、斉宣の政治的志向と和歌等の文化的営為が連動していたことを指摘している。

これに加え、冒頭で紹介した箱中に、歌道入門誓状下書・和歌入学抄等、京都の飛鳥井雅威・雅光父子に歌道入門していたことを示す資料が多数収められており、文化三年十月から斉宣は門弟であつたことがわかってきた。斉宣の和歌活動に対する意気込みの程がうかがえる。

三 「文化二年春帰国紀行」について

本資料は、参勤交代で江戸から鹿児島へ下る間（中山道経由）の紀行文であり、三十六丁から成る。文化二年三月二十二日の江戸出立から同年五月十一日の鹿児島到着までを綴っており、諸所で六十九首の和歌を詠んでいる。

【写真】文化二年春帰国紀行



また、巻末に歌道を家業とする公家の鳥丸光祖による跋文があり、長旅の紀行文を仕上げたことを労っている。五月八日条には、薩摩国の阿久根から海上の景色を眺めた斉宣が、「光祖卿のミたまハ、さそめつらしう思ひたまふらんと思ひ出ぬ」と綴り和歌を詠んだ所へ、付箋で光祖よりの返歌が示されている。これにより、この紀行文は鳥丸家へ一旦提出され、返却されたものであることがわかる。

また、これと同箱に収められている年代不詳、十二月三日付、薩州刺史雅君宛の鳥丸光祖書状に、「御詠草被指登、則合点附墨令返信候」とある。箱中には重豪関係資料は無く、光祖は文化三年八月に世を去っているため、この書状が斉宣に宛てたものであることは確実である。

これらことから、斉宣は飛鳥井家に師事する以前、鳥丸家に師事していたと考えられ、本資料も歌道修行の一環と位置付けることができる。

斉宣が歌道に傾倒していたことは、本資料の文面からも伝わる。例えば、四

月十三日には「柿本人丸大明神」に、五月一日には「太宰府」に、自らの歌道上達を祈る歌を詠んでいる。

一方、参勤交代という視点からこれを読んでみると、また異なる側面が窺える。先述のとおり、この頃の薩摩藩の財政は逼迫しており、経費節減のために可能な限り少ない日数で移動する必要があった。そのため、一日の行程が十里を超えるときなど、日の出前に出発することもしばしばであった。旅の過酷さが窺える。

また、本資料の特徴として、「川」と「坂」に関する記述が多いことが挙げられる。「川」については、渡った方法（舟渡り・徒渡り・舟橋等）や流れの速さが丁寧に記されている。「坂」については、その険しさの程度を他の坂と比較するなどして記している。

斉宣にとって、文化二年という年は改革前夜に当たり、多大な経費のかかる参勤交代の障害となる「川」・「坂」の実態に関心を寄せていたと考えられる。歌道修行と財政改革の両側面が窺える資料である。

例言

- 一 本稿は、鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵の玉里島津家資料より「文化二年春帰国紀行」を底本とし翻刻するものである。
- 一 稿本と考えられる同所蔵「文化二年春三月帰国紀行」により校訂・補充をし、◎によって示した。
- 一 編者の付した註は、（ ）で囲んだ。
- 一 変体仮名は現行の平仮名に改めた。
- 一 漢字は一部の異体字を除き、原則として底本の用字に従った。
- 一 適宜読点「、」及び並列点「・」を付した。
- 一 欠字・平出・台頭は、底本の体裁に従った。

(表紙)

一

文化二年春帰国

紀行

文化二とせ弥生十日あまり六日、

將軍家よりいとまたまひて、同じ廿日あまり二日、江戸のたちを辰の刻に立出る、春雨のつよくもふりやられて、巳の刻はかりに雑司ヶ谷といふ所にやすみぬ、人々送りとして来りぬ、たらちおの御もとへ御ことつてし侍りて、又つまのもとへ亦申送りける、

おもふなよはや一とせハたつか弓

ひきはなれつるけふの別を

と申つかわしぬ、午の上刻、此所を立て板橋の休みに着ぬ、爰にも人々送りとして来りぬ、午の刻此所を立けるに、外山に遅桜のさかりなるを見侍りて、

心なく花を見すて、行雁と

ともにそ帰る旅ハ物うき

さるの刻過て大宮のやとりにつく、一とせ旅もなかつたゆれハ、いと旅のものうくて、後夜のころより目さめぬに、有明の月さし入れけれハ、

ものうしや草の枕の旅ころも

つゆけき袖に月そうつれる

廿三日、卯の下刻はかりにやとを立出る、けふも雨ふりて四方の山々も見え

齊宣

一

す、かきりなき原を行けるに、雲も草葉もひとつにつきたるを見て、

むさしのや末はるくと限りなく

雲につける春の若草

ほどなく桶川に休みぬ、此宿のかたほとり二里はかりなる所に七十餘に及ひぬ
老女あり、我かいとけなかりける時、江戸のたちにつかへ侍るに、やまひとて
里に帰りぬ、けふは此所にやすみぬと聞て、出たとふらひものすへし、年見侍
るよりもいとふ老ぬ、かれいひなと取出してはしかたるふに、また相見んこ
ともはかりかたしとて袖しほるを見るもあわれなれハ、

ゆきかへりまたも相見んとしをへて

老はつる身の末そ久しき

とつりぬ、なこりハつきぬことなれハ、又此所を立てほどなく熊谷のやとり
につく、こハ熊谷の直実の在所と聞、いと昔を思ひ出ぬ、

廿四日、卯の刻すくるころより立いつる、いまた空くもり、雨ハふりやられて、
四方の山々雲のたえ間よりほのかに見えたるいとふ詠めそありぬ、

春雨のはれ行方のしら雲の

たえ間にミゆる遠の山々

はたつものハはや色つきて、空にひはりの鳴あかりたるもまためつらし、

いつ方と空にそれとも見え分て

霞のうちに雲雀鳴こゑ

本庄といふ所にやすらひてひるかれひしけるに、雲も晴れ日も出たれハ人々
よるこへり、又こを立出てかなな川と云河に至る、武州・上州の境ひなり、
此を過て柳瀬川の渡に至れハ、人々立さわきて舟を呼、此所を過て程なく未
の下刻倉か野につきぬ、

廿五日、やとりを立出るに、けふも猶はれやられて、霞こめたる野へに菜の花
なんと咲出たるに、雉子の妻こふ声を聞て、

雉子鳴野へハおほろに立こめて

かすみのうちに妻したふ声

佐野の舟橋もこゝよりほと近しと聞て古歌なんと思ひ出てゝ、

おもふそよ詠めやことにまさりなん

佐のゝ渡りのあけほのゝ空

ほとなく安中に休む、空ハやく／＼晴たり、このあたりハ信濃路に近けれハ、江戸よりもまた風も寒く、処／＼に桜のさかりなるも興ありぬ、松井田の左のかたに高山ありけるを、人にとへハ妙義山又白雲山といふ、その山のことなるかたちにしていわほそひへ、筆に多かくとも及ひかたし、をりしも雲のかゝたるを見て、

故郷にいかゝ語らんそひへたる

いわほをめくるしら雲の山

こゝを過て横川といふ所に閑あり、

旅人のたゆるまもなく横川の

せきの戸さゝぬ御代そかしこき

さるの時坂元につく、庭前にさかりなる桜あり、いとふ興ありて旅のうさをわすれぬ、

廿六日、けふハ道遠く笛吹山なれハ松とほしていつ、また夜も深けれハねむりを催しぬ、やく／＼半里計もゆきて夜明ぬるに、四方の山／＼谷／＼もくもかゝりてさかしき巖なんと思えず、まことに空行こゝちせり、外ある谷の雲のうちに鶯の鳴をきゝて、

しら雲に深山の谷のうつもれて

そことも分ぬ鶯のこゑ

山中といふ所に休るふ、坂元よりハ二里はかりなり、あしたのかれいしけるに雨ふり出ぬ、峠に熊野権現の社あり、上州と信州との境なり、爰より軽井沢といふ所に至れハ浅間嶽見ゆるといへど、雲うつみて見えず、名高き山をみんな心うきことなれハ、在中将の昔しを思ひ出て、

雲かゝる浅間の嶽に立烟り

はれぬ詠めの心くるしき

追分の宿に休む、爰ハ北国に通ふ道あれハ追分といふ、廣き野にして、此ほとりハ春国（巻）なれハ五こく生せず、道の左右ハ小き石のミありて、所／＼にひえなとつくれり、こゝより小田井・しほ（塩名田）なたなどといふ所を過てつくま川に至りて見れハ、常はしをかけたたり、ミかさまされハ舟にて渡すときく、ほとなく望月の驛に至れハ望月川とて川あり、左の河上二三町の所に数丈の立たる岩あり、その中ほとにあやしき一舎をつくれり、何そとへは辨財天といふ、あやしきやとりハ神楽なんと奏する所といふ、此宿ハ昔し駒をミやこに献したるか、今ハたえてなし、今宵ハこゝにやとる、

廿七日、けふも道遠けれハ、またあけやらぬに松とほして出ぬ、よへハ雨ふりたれど、とらの時より空もやく／＼晴れたり、あけなハ晴なんと人／＼いふ、半里計もゆきたれハまた雲とちて四方の山端も見えず、老里計至れば雨ふり出ぬ、しかハあれとつよくもふらす、此五日六日は晴やうて旅のうさいとまさりたり、ほとなく和田の駅に休む、きのふ通りつるしほなたの宿よりこなたハ所／＼に白く梅に似たる花あり、里の子にとへはすもゝの花といふ、また梅ハつほみにて咲やらす、桃花盛りにて、桜ハ猶咲やらす、武州もまたとをからぬに、信濃ハ国土高かふして寒国なり、ゆへに三つきほどをそしといへり、から沢といふ所に至ハ雲少し晴たり、和田峠までハ三里あまりのほる、信州第一の高山といふ、三四月までハいつも雪のこると聞、此あたりハまた山口にて、山と／＼の間を通る峯にかゝる雲のはるゝありさま墨絵にかけるくまに似り、いと面白し、和田山ハきゝしよりもミちなゝめにて、老里はかり行にまた雲おひかさなりてゆくさきも見えず、今来りし跡の山々も見えず、されとも笛吹山の雲かゝりしほどにハあらず、東もち屋といふ所にしはしやすらへは、此月初の十日比雪ふりて今に消残ると主のかたる、爰を立出て左の谷に雪の消残るを見て、

和田山や弥生の空も風さえて

猶消のこる去年のしら雪

八九町至れハ峠なり、下り道ハ甚難所にしてつゝ折にくたる、空晴、日も出たり、向ひに雪を帯たる駒ヶ嶽初てミゆる、樋橋といふ所を下り沓里餘行けハ、湖水目の下に見えたり、箱根のうミよりハ長、近江の湖にハ及ひかたし、

はれわたる四方のなきさのくまもなく

詠め珍らし末の水海

過しとしハ空晴て山と山とひきゝ所よりふしの山の見えしか、けふハ雲かゝりて見えす、

恨あれや空はれやらてあふきミン

ふしの高ねハくもに隔てゝ

下諏訪につく、爰ハ温泉わき出て、旅人うちつとひつゝ此湯に浴てつかれを休むとなんいふ、

廿八日、けふハ十里あまりのミちなれハ夜をこめて立出れば、空晴わたりて一點の雲なし、半里計も至ハ夜ハほのくゝとあけたり、水海のおもてを見わたせハ、向ひの山のはにふしの根雪を帯てミゆ、又少右のかたにハ八ツヶ嶽なんといつれも雪白く見えたり、しはしゆけハ塩尻峠に至る、沓里半ののほりなり、水海の詠めいわんかたなく、また有明の月残る、多かくとも及ひかたし、しほしりといふもふしに多んありていと面白し、

水海や詠めのすゑの雲はれて

またふしのねを見るも珍らし

峠ハ風はけしくて、たまれる水なんとの氷あて、行道ハ霜白く見えて、む月の初めつかたにことならず、爰より道なゝめにくたる、沓里半をへて塩尻の驛に至る、此宿を出れば桔梗か原とて廣きを行、こゝハ古戦場といふ、土を小高くもりて戦死の人の印ときく、

武士の名ハ朽もせて今のように

のこるしるしや春の若草

洗馬の宿に至る、爰ハ源義仲朝臣の馬をあらひし故名つくといふ、本山といふ所に休む、爰を立出れハ山と山とのあひたを行て奈良井の宿に枕をかる、またあつま路のほと近けれハ今宵夢にミたり、

いく里をこえて日数ハ程ふれと

隔てぬものハあつま路のゆめ

廿九日、此宿を出はなるより鳥居峠の登なり、坂ハ和田よりもけはしくあれとも、うすひよりは行やすし、峠までハ沓里はかりの登なり、風はけしく吹て四方の山々雪を帯たり、木めもまた出やらて詠めいと寒し、雲ハやゝ晴たりといへとまた日ハ出す、峠をくたれハつゝ折の坂ミちなり、鳥居峠ハ木その御嶽の鳥居昔しありしにより名つくとかやいふ、木曾川始て見えたり、白浪あらわぬ瀬もなく、爰よりは左にも右にも見て行、此坂をくたれハやふはらといふ、峠よりハ半里あまりをへたつ、此驛を出てよりハ深山幽谷にして、これよりさき七里の間竹生せずといふ、右に少うちひらけたる高き所有り、源義仲朝臣のすミ所の跡といふ、宮(宮)のこし(越)に至て休ミぬ、福嶋といふ所よりハ白浪しらあわ計りそミゆる、またけふも雨ふり出ぬ、木曾のかけはしハ西蜀の棧道に比すると聞、過しとし通りつる時里の子に問へは、百年にも及ひつらん作りかへしといふかけはしハ河にわたせる橋にあらず、岨つたひのミち中たえたるに、あなたこなたより木の末を土より出してかさねあけたれば、はしらもなきゆへにかくいひ来るなるへし、このあたりハ水深くして五六丈もありぬと聞、水ハあふよりもふかし、河音もきこえず物すこきさまなり、

旅人も心あやうくおもふらし

いはほにわたす木曾のかけはし

爰より半里をへて上松につく、廿五日江戸を出たる人来て江戸のたちの平安をほふす、

四月朔日、よへハ雨ふりたれとけさハやゝ雲薄、雨ハふらす、あけ松を出、須原へ行道に香寺あり、臨泉寺といふ、その庭より見おろす谷のけしき、大なる

疊ミたる岩ことはにも及はれず、あやしき来歴ありといへど信用しかたし、又分行山中にをのゝ滝といふあり、そはたちたるいはほのことに高きよりものにもさわらて一すちにそおつる、いと珍らし、

山姫のさらせる布と人やミン

いわほにかゝる小のゝたきつせ

須原に至ハまた雨ふり出ぬ、爰を過て野尻に休ミぬ、二里よをへたてゝ(三留野)ミとのに枕をかる、けふハ更衣なれハ、

けふよりハ夏や来ぬると諸人も

薄きにかふる旅の衣手

されとまた風寒くきさらき始の如し、郭公をまたきゝたる人なし、あるしにとへは五月ならてハ出ぬとかりぬ、

二日、雲晴たり、一里半行てつま籠に至る、是より木曾川を遠さかる、馬籠に行道に滝あり、いとも見所あるたきなり、馬籠に休ミぬ、是より木曾の山中をいてはなる、しはし行、信州・濃州の境に至、落合・中津川をへて大井の駅につきぬ、

三日、日の出る比立出る、けふハ空よく晴たり、此里はなれにこゝにも大井河といふ流あり、東海道の大井河にはたくふへくもなけれど、なをよのつねの河ならすそミゆる、爰より末ハ十三峠とて数々の山を越る、大久手といふ所に休、爰を過てひわ坂をこゆる道ハ山の尾上を行、峠より見わたすに、こしのしら山峯こしにミえたり、

けふハ猶雲吹晴て三越路や

空にそひへし雪のしら山

伊吹山はるかなれとさたかにミゆ、細久手といふ里を過て御嶽に宿をかる、爰を御嶽といふは、よしの蔵王権現を勧請したるゆへに名つくとかや、

四日、空晴たり、またあけやらぬに立出る、伏見といふ所を過て大田河をわたる、舟さすほと一丁はかり、浪はやくおそろしき水面なり、木曾川・飛弾川の

ひとつに流れになれるといふ、河辺を少し行きて大田の驛にいたる、爰を出れば、右ハ石壁のそはたちたるに、左ハ巖下千仞の河水急にして、あやうき峠つたひ也、また筏をさす瞬目の中に数しらすそ過ゆく、峠の右のかた小高き所の岩をきりうかちて其中に觀世音を勧請す、人々觀音峠といふ、うるまの里に休ミぬ、爰を出て末かきりなき廣き野にいてつ、この野三里四方なりと聞、名をかゝみ野といふ、加納の宿に草の枕をかる、

五日、少しくもりたり、加納を出、一里半行て合渡川あり、此河ハ長良河の水のふたつにわかれて少此河上にて落合て流るゝ名なり、水上も廣くミつ深しといふ、爰を過ていとぬき川也、橋を行、さしも廣からぬ河なり、美江寺といふ所を過てくいせ川に至りて舟二て渡る、是も大河也、赤坂にしはし休ミぬ、半里(昔)行ハあふはか村に至る、圓願寺といふ寺によしとも・よし平・ともなかの墓所あり、昔しを思ひ出て、

はかなしや思へはぬらす袂かな

名ハ今の世に猶くちすして

爰を過て青野ヶ原古戰場なり、垂井といふ所を過て野上の里といふ、爰ハ昔し(班)はん女か在所といへり、養老のたき此あたりより近しと聞く、関ヶ原を過行ハ大関村といふ村あり、此所不破の関ありしといふ、いつれの所そとへは、左のかた民の家のうしろのかたに杉一本ある、このあたりなりとなんいひ傳ふるとかたる、

世々をへて久しくなりぬ板ひさし

ふわの関屋の跡たにもなし

やゝ行ハ関の藤河なり、

榮へ行君の恵のふかきかな

きよき流れの関の藤河

ほとなく今須に至りて枕をかる、

六日、今須を出て柏原へ行間に八尺計の標あり、江濃両国の境寝物語とするせ

り、わつかなるミそをへたてゝ民のわら屋のあるか、ものいひかハすほどのま
ちかさなり、江濃の境ひこの国より他国へふしなから物語するとて、土俗にね
物かたりといひならばせり、醒井に至れハ岩間より水湧出て清し、ゆへありけ
に見ゆる、里のかたハらを流るゝかいさきよけれハ、此所にてハ井の水をくま
す此水を用ゆとそ、是よりはんは(番場)の里に行、入口に蓮花寺とて寺あり、北條仲
時始自害せし所といへり、しはし此所に休ミぬ、爰を過てすり(掛)はり峠なり、け
ふハ空能晴わたりたれハ、湖水眼下に見えて漫々たる眺望いわんかたなし、磯
崎のなゝめにつらなり出たる三保の松原のおもかけうかひて景色気筆にもそめ
かたし、竹生嶋・早崎・月出崎・海津大崎なんと遙に見えたり、猶夏のはしめ
なれとも向ひの山くは猶霞ミておほろに見ゆ、

にほの海や猶夏ながら霞あひて

おほろにミゆる四方の山く

ことのはにいひも及はぬ詠めかな

名にあふミ路の鳩の海はら

詠めいわんかたなき好景なれハ立去かたくそおほゆ、鳥居本に至る、昔し此所
に多賀の鳥居ありしゆへ鳥居本と名付るといへり、ほとなく高宮につきぬ、
七日、此里はつれに川あり、高宮川といふ、水なき河原を行、西に和田山、南
には山など見ゆる、二里よを過て越知川の里に至る、爰を出はなれてちち川
あり、此ほと雨ふらねは水あさし、河原二三町を行、しつの屋あたりにいたれ
は老蘇の森樹木しけりてミゆ、まつ原のあなた比叡の山初て見えたり、武佐の
宿に休む、爰を過て横関川也、是も水なき河原を行てミれハ、舟をつなきつゝ
けてその上に板をならへ舟はしとす、鏡村に至る、昔しハ駅なりしに今ハ左に
ハあらず、爰をへて野洲川にいたる、常ハ舟わたしなれ共、あさけれハ板をな
らへてはしとせり、

旅人のゆきかよひ路もあす川や

もすそぬらさす渡るうれしき

守山を過て草津にやとりをとる、あすハ伏見につくとて人々よろこへり、
八日、けふハ能はれたり、卯の時及むころ立出る、二里餘をへてせたに至る、
湖水の眺望いわんかたなし、せたのはしを渡るとて、

旅衣いくへの野山越てけふ

はるくわたるせたの長はし

粟津の原にゆけは兼平のつかあり、草しけりてあはれなり、せん所・うち出の
はまなんと過て大津にしはし休、爰を出て少つゝの坂路をゆく、是よりハ追分
まで人家つゞけり、大谷といふ所に至けれハ近江・山城の境とそ、左の家の方
ちに湧出る水あり、はしり井(走)といふ、

コノサカヲコ、ロセキくハシリ井ノ

水一ハヒカタヒ千金

とおかしきことをつゞりぬ、右に蟬丸大明神の社あり、此所相坂山ならんか、

ゆきかよひ知もしらぬも旅人の

おさまる御代に相坂の関

程なく追分といふ所に至、爰ハ京・伏見への追分と聞、此所を過て勸修寺村・
藤の森などを過て伏見の里につきぬ、
九日、また末遙くの旅路なれハ、つかれをやすめんとけふハ爰にとまりぬ、
十日、そらくもりて雨ハつよくもふらす、卯の時過る比伏見を立て淀川を舟に
てきたる、河きしに至れハ舟子共たさわきてかまひすし、きのふハ雨ふりた
れハ水少しましたりといふ、舟を出せは水勢はやくして、しはしのうちによと
の邊りに至る、名に聞し水車の年久しくつもりたる詠め又珍らし、爰を過て芦
しけりたる所を行、八幡山見えたり、こたひハ神にあゆミをはこはんと思へと
も、いそく旅なれハ舟のうちよりふし揮ミて、
ふし揮む御代そ榮る石しミつ

清き流れの神の恵ミを

右のかたに妙喜庵とて竹しけりたる庵室あり、しはし過れハ江口の里、昔し江

口の君のすミし所ときく、芦のあなたをこく友舟のさたかにみえ又あしまにかくれなとしたる眺望面白くミゆ、

あし間を八河瀬の霧の立こめて

みえ見ミえす見くたる友舟

ほとなく難波のたちに至りぬ、

十一日、是よりもまた幾里をへたてし旅なれハ、爰にもまたけふハとまりぬ、十二日、けふも空晴たり、難波のたちを辰の時立出る、半里ほど行て北野といふ所に休む、爰ハつな敷天満宮の社あるによりて此処をも北野と名つくとなん、是より半里餘を行は十三川といふ河あり、大河なり、舟さすほと二三町もあるへし、水ハさのミ早くもあらず、この河よと川のわかれなり、老里ほどへたてゝ加嶋といふ村あり、爰にしはし休ミぬ、爰より四五丁行ハ神崎川といふ、是も舟わたしなり、淀川^(尾崎)のわかれにて、十三川とかわることなき大河也、長洲村・大物の浦をへてあまかさきにいたる、こゝよりハ難波津村近し、梅片葉のあしあるときく、立よりて見んも心なけれど、旅路をいそげは立もよらず、

おもひやる春は長閑き難波津や

名におふ梅の花の色香を

老里行ハ、むこ川^(武庫)あり、常ハ水なくてかちにてわたる、けふハ水少し流れたれば板にてはしをわたせり、此あたりは川地より高くて、堤を十二三間も登りて河なり、摂津國の川ハ皆是に同し砂川也、むこ山・むこの浦ミゆる、

海原や行かふ舟の真帆かたほ

吹もしつけきむこのうら風

しはし至ハ枝川といふ河あり、是もむこ川と同しく常ハ水なくしてかちにてわたる、西之宮に至れハ社あり、事代主神をまつるとかたる、今宵ハこゝにやとる、

十三日、そらくもりたり、老里餘行ハ芦屋川とて砂川あり、またあし屋の里といふ所名所なり、爰を過て住吉といふ村あり、難波の住吉とハかわりたり、脇

の濱といふ所に至る、このあたりの海辺をみぬめの浦といふ名所ときく、少へたてたり、

行かへり名のミ計ハきつれと

なをもミぬめのうらの詠めそ

生田川にいたる、是も砂川にしてつねは水なし、河上に布引の滝あり、爰よりハ近しといへはゆきて見れハ、雲にそひへたる山あひより落くるたきの布をさらせることならず、少し林下の山間にめたきとてたきあり、いつれもいわんかたなき詠なり、

あふきみる峯よりひろき滝なれや

けふ布引と人のいふらん

三四丁行ハ生田の杜なり、名所なれば、

ゆきかへりなれてもあかし年ことの

旅ハ生田のもりの詠めハ

杜のうちに社あり、かたはらに籬の梅とて寿永の秋源平両家のたゝかひに梶原源太景季の籬にさしたる梅といひ傳ふる枝葉しけりて老木也、いと昔しを思ひ出たり、生田川の河上にまや山^(摩耶)といふ高山あり、山頭に寺あり、四方の眺望繪かくとも及かたしと聞、また山のあなたハ有馬なり、温泉出る所とぞ、誠に目の下に見ゆるといふ、難波より至れハ九里の道をへたてたり、しはし過は湊川也、是も生田川にかわるることなし、此所ハ楠正成朝臣の戦死の所と聞、川より少しこなた田の内に一字の堂あり、正成朝臣のはかといひ傳ふ、立よりて見るにいとふ物さひてあわれにそ覚ゆる、

立よれハ袖もそゝろにぬらすそよ

なをしたはるゝ人の昔しを

兵庫といふ所に休、爰ハ平相國禪公のつかしめられし福原の経の嶋といふ、南のかたに和田崎見ゆ、三保の松原にて詠めいわんかたなし、是より老里半をへたてゝ西須摩といふ處あり、昔ハ爰より國境まで須磨といひしと、五六丁行

は須磨寺といふ寺あり、敦盛朝臣の手馴されし青葉のふえ、其外種々の品あり、又若木の桜とて名ある桜あり、ゆへありけにミゆ、昔ハ海邊なりしといふ、此あたり須磨の関ならんか、

今ハはや須磨の関屋ハあとたえて

まつ吹風の音のミそ聞

此あたりより大蔵谷までハ濱へにて砂道なり、松原を行、三の谷、二の谷、一の谷とて砂川あり、右のかたハ高山雲にそひえ、左ハ海にて紀の國の山々見えたり、三の谷ハ寿永の秋平家の城ありし所といふ、今に跡ありと聞、山ハひよとりこゑにつゞけり、今ハ松のミ生て外に木生せず、一の谷の邊に敦盛朝臣のはか路のかたわらにあり、苔生茂りていとふあはれなり、海上遙に見わたせはあはち嶋見ゆる、壱里をへたてしとそ、海上の眺望ことにすくれたり、

海原や詠めの末ハしら波の

おほろにくもる淡路しま山

是よりしはし行ハ砂川あり、摂州・播州の境なり、是よりさき濱へに生茂る松の塩風にもまれて梢ハのひやらて、枝さしかはしたる松と松との間の砂道を行、爰を土俗よんで舞子のはまといふ、大蔵谷に草のまくらをか、此宿に忠度朝臣のはかしつか屋のうちにありとなん、一方に柿本人丸大明神の社あり、大社なり、いと貴くあふき思ひしかは、もふてつゞ猶ことのはの生茂れかしと祈をこめてふし拝ミぬ、

行末ハ猶生茂れことのはの

いのりをこむる神の恵ミに

十四日、このやとりを立出る、爰よりは明石までハ家つゞきにして半里をへたてたり、明石川とて河あり、川下ハ湊あり、名所と聞、よへより雨ふりたればまた雲はれず、海上をミわたして、

しら波や詠めの末も明石かた

また雲はれぬ沖のしま山

二里餘を行て西谷といふ、爰を過て加古川にいたる、しはし休、此所に加古の松とて枝たれし松あり、老木也、また和泉式部のはかあり、この里を出てはなるれハ河あり、加古川といふ、舟にて渡る大河なり、舟さすほと四五十間もあり、水勢ハさしも早からず、爰を過て数見村といふ所あり、こゝより高砂・尾上へ行道あり、壱里ほどの入りて豆崎村といふ所に出ぬ、ほと遠けれハ立もよらず、しはし豆崎村に休む、姫路の少しこなたに市川といふ河あり、大河也、河原を五六丁ほど行、舟わたしなり、さほさすほと一丁もあらんかし、爰より半里をへたてゞ姫路につく、

十五日、よへより雨ふりたり、夜のほのくとあけやらんとする比爰を立出んとすれハ人来て、爰より二里餘をへたてたる青山川といふあり、常ハ水なくしてかちにてこせと、よへよりの雨にて水まさりてかちにてハこさんんことなりかたし、しはし雨ふらされは水ハ早く落るといふ、夜明なハ雨ふりやミなんと人々いふ、しはしすれハ又人来て、川水いやましてけふハこす事申く思ひもよらすといへは、長き日をなにとして暮さむとて、人々よりあひて一時三十首詠を催しぬ、それもしはしなれば只空のはれよかしとうち詠むるに、猶雨ふりてやまず、

日数へむ末遙くの旅なれハ

こゝろあらなん雨色の空

末の時過る比、空やくはれたり、人々よるこひて、あすハ水落る、かちにてわたりぬへしやとかたらふに、また雲かゝりてふりミふらすミしたる空なれハ、ミな人心にかけて長き日もやうく暮に及ひぬ、

十六日、よへは雨の晴まされたため空なれハ、けふハ水も落なんと思ふ所に、又卯の時前より雨ふり来りぬ、しはしすれは人来て、けふハきのふより水落てなをちの下にかゝる、巳の時に及はゞかちにて渡も出来ぬらんといひおこせり、しかハあれと、三石までハ十里を行道なれば、夫より人々川をこしなハ遅くもなりなん、またらうかわしくもあるへしと思ひしかは、さあらはけふは爰に

とまりて、あす早くこすへしといひやりぬ、やくすれば巳の時過るころより雨ハまたふりミふらすミしたれば、人くよりあひて空のミ詠めいたり、けふも長き日をいかして暮さん、いと旅の物うき事も身にシミて覚ゆ、

物うさよなをふる雨の長き日に

たひの思ひのはれぬまそなき

暮に及ふ比人来て、猶河水落て、あすハかちにてこすことあからんといふ、ミ人よろこひあひぬ、

十七日、卯の時前出て青山川へ至れば、人くつとゐてわたりをいそく、なを平水よりも深しといふ、こしにかゝれり、臺たつものにてわたす、爰ハ東海道の河をわたすわさにたかひて人く手なれされハ、これかれおそれをなせり、しかはあれと皆人つゝ、かなく爰をわたせり、二里行ハ鶴といふ所に休む、爰より半里よをへたてゝあそ川といふあり、常ハ水なくしてかちにてわたる、是も水ましたれハ板にてはしをかけり、又爰より半里を行ハ正条川といふあり、舟渡しなり、これも水まして水勢早く、舟を一丁ほど流せり、爰をへて片嶋といふ所にしはし休む、壱里半行ハ鶴龜新田といふ所あり、爰をへて有年川に至ハ舟わたしなり、これも水まして水勢早し、有年宿に至る、爰よりハ坂道にて、しはし行ハ梨ヶ原といふ所を行、いらかやふれたる賤か家のわつか軒をならへたり、とりあえずされことを、

夕チヨレハナンニモコ、ニ梨力原

湯卜茶卜計リノンテコソ行

半里ほど行ハ播州・備前の境なり、こゝより三石までハ三石峠といふ坂道なり、山と山との間を行、今宵三石に宿をとる、

十八日、けふもくもりて少つゝ雨ふりたり、坂道をしはらく行ハ中村といふ所に至る、壱里半をへて片上といふ所あり、後ハ山にして、前ハ三里の入海なり、爰より牛窓といふ湊六里あるといふ、牛窓ハ名所といへり、是よりいぬへ村(伊部)・かゝと村といふあり、此邊すゑものをつくる、花瓶・風瓶・たつものなんと色

くある所なり、吉井川といふ川あり、中國一の大河なり、作州津山へも通舟あるといふ、河上ハ作州いんの庄とかやいふより流れ出るといへり、棹さすほと二丁に及ひぬ、水ハさしも早からず、爰を過て一日市に休、夫より藤井を過き二里行て岡山につきぬ、けふハ卯月十日あまり八日になれと、また郭公をきかす、今ひと日ふつ日にハ聞もやせんと思ふ所に、人くと色くかたらふうちに、きのふ姫路を立出るに、夜のほのくとあけはなる比、供しほんへるものゝほとゝきすをほのかにこゑきと語る、また夜のあけさりしうちよりまどろミたれハ、さてしもそのうちならんか、此ほときまほしき折なれハきくもめつらしくて、

人傳に聞もめつらしほとゝきす

つれなやわれに声おしミけん

とつゝりはんへりしに、おりしも空くもりて雨のふりミふらすミしたるに、また郭公の五こゑ六声なきしかハ、

心あれや待もつらしとおもふらん

雲間にもらす山ほとゝきす

十九日、よへより雨ふりてけふも猶やます、まん(万成)なり村・法華坂といふ所を行ハ正面村といふあり、入口に小川あり、備前・備中の境なり、しはし行ハ板倉といふ驛あり、入口の左の山手に吉備津の宮とて大社あり、二丁餘入込所なり、此所吉備の中山ならんか、

幾里のかりの枕やたひころも

ひかすかさねて吉備の中山

爰を出て壱里行ハ川邊川といふ河あり、舟わたし也、是も大河なり、此ほと雨にて水ましたりといふ、川邊宿にしはし休ミぬ、爰を出て尾崎村といふ所に至る、壱里半をへて矢掛に草のまくらをかゝる、

廿日、けふハ道遠けれハまたあけやらぬに立出る、よへより空くもりたれと雨ハふらす、壱里半餘行て夜ハほのくとあけわたりぬ、此ほとより雨ふりたれ

は道あしく、七日市といふ所に川あり、七日市川といふ、常ハかちわたりなれと、水増して臺にてわたす、こしより少し上にかゝれり、爰も青山川と同じく、なれされハ人々おそれをなせり、此渡りを過て七日市に至る、しはし立よりぬ、耆里をへて高臺といふ所に至る、大師堂ある寺あり、はなはたひん寺なれと眺望ありぬ、爰を出て少行ハ備中・備後の境なり、上御領・下御領などいふ所を過て神名邊に至りて休、右の山上に福嶋左衛門大夫正則の家臣福嶋丹波といふ者の城跡ありと聞、空や／＼晴れたり、耆里餘行ハ大渡川といふ河あり、大河也、是も水ましたり、舟にて渡る、山手村・箕越・今津なんといふ所を行て坊主坂峠をこえ、尾の道につく、爰ハ入海あり、是より輒のうらハ海上五里ありといふ、又此宿ハ寺多所なり、千光寺といふ左の山上（寺）にあり、海上の眺望いとふ詠めありぬと聞、此所に枕をかる、此宿までハ江戸と故郷と道半なりと聞、はや日数も廿日あまりにもなりぬるに、また行先の廿日あまりもありぬへし、思へはいとふ旅そ物うき、

旅衣きなれし道ハ半はにて

ひかすかさなる末そはるけき

廿一日、けふも道遠けれハまたあけぬに此宿を立出る、爰より三原までハ海邊なれと、また坂道も行所あり、耆里餘行ハ福地村といふあり、名にも似ぬ所なり、少し行ハ海邊也、よへハ雨ふらねと、出たつ比より雨ふり出たり、此ほとりハ右ハ山左ハ海にて眺望ことにすくれたれと、またあさあけの比なれハ、向ひの山／＼雲かゝりて見えす、糸崎といふ所より少こなたにて夜ハ明ぬ、されとも雨ハしきりにふれは海上の詠めなし、しはしするうち雲少し晴たれは向ひの山／＼見えたり、少し行うちまた雲かゝりて雨ふりぬ、雲の晴晦繪にかくとも及ひかたき詠めなり、糸崎にしはしやすらひて海上を見わたせハ雲や／＼晴れたり、海こしの嶋山また雲かゝりたるもありぬ、

あけて行空もはるかに海原や

雲間に浮む沖の嶋山

爰ハ八幡の社あり、雨ふりたれハそのまゝふし揮て、

此神に猶祈るなりもろ人も

われも同じくつゝかなかれと

爰を出て坂あり、備後・安藝の境なり、この濱といふ所に至れば猶空晴て風吹来りぬ、是より半里餘をゆけは雲晴て日出たり、沼田本郷といふ所に休む、加屋市村・新庄村・玉利市村なんといふ所を行、坂少ツ、あり、松の山といふ山坂を行、左右松にして、峠よりハ野山の眺望いと面白し、半里をへて西条四日市に入相の鐘響比つきぬ、

廿二日、日の出る比立出る、かつる坂といふ坂を行て飯田村といふ所に至る、久井村峠・瀬野尾峠なんといふを行ハ瀬野尾村あり、しはし休、爰を出て海田市・船越坂などいふを行ハ、谷合に初て早苗をとるを見て日数のほとふりしことを思ひ出て、

おもひやれハ日数重ねし旅ころも

田面にいまハ早苗とるなり

ほとなく廣嶋につきぬ、

廿三日、此宿りを立出る、己斐村・草津村を過て井の口多尾といふ坂を行、此あたりにてハ峠といふことを多尾といふ、廿日市休、廣嶋より玖波までハ海邊なり、廿日市より海上を見れハ宮嶋見えたり、耆里をへたつ向ひの海上嶋山多し、みやしまハその嶋／＼のうちにて大山なり、海上の眺望いとふ詠めあり、旅の物うきもうちわすれぬ、

海原やみるめはるかに詠めあれや

しはしわするゝ旅の物うき

爰を出て宮内・大野村といふを行は四十八坂とて坂あり、石多し、峠四十八あるといへと左にハあらず、十五六峠もあるへし、至ての難所といふにハあらず、此坂を下れハ玖波に至る、草の枕をかる、此やとりの庭に老木の松あり、枝さかへ／＼て枝より枝のさきまでハ廿二間あまりあり、珍らしき老松也、またう

しろのかた海上に臨ミたる水亭あり、けふハ空晴たれば、水亭へ至りて海上をミわたせハ、波閑にして釣舟のゆき々も珍らし、

けふハなを雲吹晴て海原の

なミも静にうかふ釣舟

長き日の暮る々も忘れ居りぬ、

廿四日、雲晴たり、爰より小方といふ所までハ海邊を行、木野村といふあり、此邊坂也、しはし行ハ小瀬川といふ川あり、舟を横にしてその上に板をならへて舟橋とす、此川安藝・周防の境なり、また坂道を行て関戸に休ミぬ、爰より半里行は御庄川といふ川あり、大河なり、舟にてわたす、此川壱里へたて、岩國といふ所あり、吉川氏の城下なり、錦帯橋とて珍らしき橋あり、程あれば至らず、柱野といふ所あり、中の多尾・切通多尾・七曲坂なんといふきうなる坂道なり、爰をへて高森にやとりぬ、

廿五日、けふハよへよりまた雨ふり出たり、爰を出れば坂道なり、差川峠に至る、下り道ハきうなり、呼坂といふ所あり、多尾市・久保市を過て花園といふ所にやすむ、二里を行ハ徳山といふ所に至りて、また二里をへて福川に今宵ハ枕をかる、此所は海邊なり、終夜波の音を聞て、

聞もうし思ひそ増る草まくら

あらしなきさの波の音をハ

廿六日、くもりたり、卯の時過る比立出る、少し行ハ坂道なり、へた市村に至るとのミ、鵜毛村を過て宮市に休ミぬ、爰を出て佐波川といふ川あり、大河也、水ハさのミはやからず、舟にて渡る、爰より坂道を行、臺道村といふ所に至る、夫よりたて石といふ所のこなたに中國一の大溜池あり、半里ほともあるへし、老里餘を過て小郡川といふ川あり、是も大河也、舟渡し也、川岸に至れば小郡驛なり、爰に今宵ハ草の枕をかる、爰よりは薩摩も近づきぬれハ、今宵夢にミたり、

薩摩かた近づきぬれは夢路にハ

はや先立て帰へる故郷

廿七日、よへより空晴て、けふハ夏なから空も霞めるやうにて一天雲なく晴たり、高根村を過て并木の松ある道を行ハ、わりこの松といふあり、防州・長州の境なり、爰を過て下山中村といふあり、半里を行ハ二俣瀬川といふ川あり、大河也、舟にて渡る、下の方にて瀬二ツに分る、新道峠といふ所を行て船木に休む、厚狭市・石住などいふ所を過て蓮臺寺峠といふあり、爰を過て吉田につく、

廿八日、けふハ空晴たり、この宿のはつれに吉田川といふ川あり、舟にて渡る大河也、是より并木の松ある道を行、小月といふ所あり、爰より二里行ハ長府といふ所あり、休ミぬ、此あたり海邊なり、爰を出て坂道を二里行ハ赤間関なり、少しこなたに漁村あり、檀之浦といふ、爰ハ寿永の比平家入水ありし所といふ、海をへたて、ハ九州なり、壱里もあるへしとミゆる、潮のミちひ早くして、潮の流れ木曾川よりもきうなり、潮時によつて舟のゆき々をするといふ、赤間関入口にあミた寺といふ寺あり、此寺に

安徳帝の御影其外平家の画像などあり、いと物あわれなり、今宵は爰にやとる、あすハ九州へ渡れハ故郷もほと近くなれハ、人々よるこひあへりぬ、

廿九日、空晴たり、此海ハしほ時によりて渡す、辰の時しほよしといへは、舟に乗り此海を渡る、向ひの山々ハ九州豊前の山にて、左のかたハうちひらけたる海上なり、向ひのきしハ門司の浦・田ノ浦・め(和布刈)めかり明神の宮などミゆる、右のかたハ岸柳鳴、又よしハ瀬ミゆる、此よしハ瀬ハ故大閤秀吉公九州入の時、ゆへありてころされし舟長のために瀬の上に石とうをたてたり、土俗よんでよしハ瀬といふ、又此うミを硯の海といふと聞て、

名をとへは硯の海と聞は猶

ふての林にしけれことのは

此渡りハ五十丁なり、大里といふ所に舟つきぬ、しはし爰に立よりぬ、また小倉へも三里の舟渡ありといふ、爰を出て濱へを五十丁行、并木の松あり、海上

をミわたしたるまた詠めかわりていと面白し、小倉に休、沓里半行は豊前・筑前の境なり、又沓里半を過て黒崎といふ所につきぬ、

晦日、ひのほる比立出る、三里をへたて、木屋の瀬といふ所に休、沓里を行ハ境川といふ川あり、舟にてわたる、國さかひにハあらず、直方村を行過れハ小武村といふあり、此處ハ柴薪のふそくなる所なれハ、石炭とて石をやきて炭のかわりにたく、にほひ甚たあしく、爰を過て飯塚につきぬ、

さつき朔日、よハ雨ならんかしと思ひしに、今朝ハ空能晴たり、沓里行ハ天道町といふ、爰より二里過て内野といふ所あり、是より冷水峠とて坂道なり、峠までハ沓里なり、二里餘を過て山家といふ所に至りて休ミぬ、此宿を出はなれて六七丁行ハ太宰府への道あり、過し年至れハ、こたひハ神にまうてもやらず、こしのうちよりことのはの榮へあれかしとふし拌ミぬ、

まもれたゝ願ひをかけて行末ハ

猶生茂れことのはの道

又沓里餘を行ハ筑前・筑後の境なり、爰より沓里餘行て松崎に枕をかる、二日、二里至れハ古河村といふあり、久留米の追分なり、半里行ハ神代川とて筑後第一の川あり、舟渡なり、二丁とも舟にて渡る、又半里行ハ府中といふ所に至る、しはし此所に休、爰に高良山とて大山宿のうしろにあり、山上に宮あり、大社なり、坂道にして甚あしく、此山より温石出る、坂石温石といふ、半里餘上る、爰を出て桜多尾・一条村などを過て宿の町に至る、二里行て瀬高にまくらをかる、此宿ハ夏の始より蚊多出て旅人苦しめりと語る、三日、よハくもりたれとけさハ晴たり、二里行ハ原の町といふ所あり、此邊田道又ハ杉の并木ある所を行、又沓里行ハ北の関とて村あり、爰より半里行ハ筑後・肥後の境なり、南の関といふ所に休、肥猪村・平野村を過れハ腹切坂とてきうなる坂あり、鍋田村を過て山鹿につく、此宿に温泉あり、旅人も浴すといふ、

四日、宿の出はなれに川あり、菊池川といふ、舟渡しなり、此川高瀬川の末と

いふ、廣の町といふ所を過て植木といふ所に休、鹿子木村・御馬下村などいふ所を過れハ熊本に至る、爰を出はなるれハうちひらけたる田道を行、右のかたに肥前うんせんか嶽見ゆる、川尻といふ宿につく、此邊海上近しといふ、五日、けふハ道遠けれハまた夜をこめて立出る、宿出はなれに川あり、名をミとり川といふ、舟渡しなり、十日あまり雨ふらねは、水ハ落て渡る瀬もあかりけれハ、

わたる瀬も安き流れのミとり川

水のみとりハ名のミ計りに

夜ハほのくくと明たり、爰よりハ近道あれハ近道を行、古保里といふ村に至る、けふハ端午なれハしつか軒はにあやめをふけるを見て、

しつか屋の茂るしのふの軒はにも

千世の根さしのあやめをそふく

豊福村といふ所あり、沓里半を過て小川といふ所に休、爰を出て宮の原村・岡中村・種山村などを過て右のかたに肥前の山く海こしにミゆる、此あたり田道なり、又萩原通とて近道あり、しはし行ハ求摩川といふ大河あり、舟にて渡す、棹さすほと二丁よもあるへし、高田村に至る、此近道ハ馬次なれハ常にハ旅人のゆきゝなしといふ、沓里半行ハ海邊を行、海上の眺望詠めありぬ、しはし過て日奈久につきぬ、此宿にも温泉あり、是も旅人浴すといふ、

旅枕かりねの床のあやめくさ

むすふやけふの千世のことふき

六日、朝くもりたれとも、日のさしのほる比より晴たり、宿出れハ海上遙にミゆ、向ひの山くハ天草嶋、沓里をへたてたり、左のかた八代、求摩川の川下にて小嶋数多くあり、右のかたに薩摩のうち長嶋遙にみえたり、此道ハ海邊の山の岨をめくりて坂道なり、海上の眺望いといはんかたなし、

けふハ猶風も静にうなはらや

朝日うつろふ沖のしま山

爰よりハ薩摩のうち米津といふ所に舟路あり、なミあらし所故軽々敷ハ舟にのらすといふ、耆里ほと行ハ山の間を行、こゝよりハ少し海邊をはなる、君かふちとてけわしき山岨つたひの坂道なり、左ハ石壁にて、右は数十丈の川のふちなり、水はさまて深からず、大河にハあらず、此五六年まへより坂の下を通りて川をかちにて渡れハ、岨つたひの道をよくる道あり、下り坂ハ甚きうにて七曲につゝ折に下る、爰を過れハ二見村とて村あり、爰より耆里餘行ハ赤松太郎とて上り下りきうなる坂道あり、太郎といふハ山のそふ名を此國にてハ太郎といふ、此山を下れハ田の浦といふ所あり、海邊に又出たり、爰よりも米津へ舟路あり、しはし休、温泉あり、耆里半行は佐敷太郎とて赤松太郎よりも長き坂道にて甚きうなり、此山の峠より薩摩の國出水のうち矢はつ嶽といふやま遙にミへたり、

旅衣いく日重ねてさつまかた

やはつのたけを見るそうれしき

廿六七丁行ハ佐敷といふ所につきぬ、爰も海邊にて米津へ舟路あり、あすハ薩摩の國に入とて人々よるこひぬ、

七日、けふハ坂道なれハあさ明の比より立出る、むねつき坂とて甚きうなる坂を行、半里過て湯の浦といふ所に至る、爰にも温泉あり、求摩への道、又日向の國、大口への道あり、耆里行ハ貫太郎峠也、此山坂も甚きうにして長き坂なり、爰よりも矢はつ嶽ミゆる、又長嶋山こしにミゆ、右のかた山こしに天草嶋ミゆる、赤松・佐敷・貫、此三ツの山を合せて土俗に三太郎といふ、耆里半を過て貫村に行、爰を出て耆里行ハうた坂とて是もむねつき坂と同じきうなる坂道なり、水俣といふに休、此の宿を出てしはし行ハ川あり、井手の上を行、陣の坂とて是もうた坂などにをとらぬ坂なり、此邊海ハ少しへたてたり、峠よりハはらを行、少し下れハ海邊なり、又并木の松ある道を行、境か谷とて川あり、肥後・薩摩の境なり、水俣よりハ少しつゝの坂道にて二里餘なり、川ハはしあり、渡れハうちひらけたる原に出る、笹原といふ、此所に旅行の度ことに

國民新に休所をもふく、ミな杉のはのかへにしていと涼しくミゆる、耆里餘をへて米津といふ所に至る、此間も坂道なり、爰に旅行の為に飯屋をもふく、日奈久なんとへ通船あり、此所に天神の宮あり、米津天満宮(宮)としようす、平川塚、廣瀬川といふ川にはしあり、爰を行て出水の麓につく、爰にも飯屋立置り、國民よろこひてさゝへなんと取出して人々にすゝむ、爰よりハ其所に飯屋又ハあらたに茶亭をもうけぬ、

八日、よへより雨ふり出てゝけふも猶晴やらず、ふりミふらすミさためなし、耆里行ハめんの平に至る、茶亭に立よりぬ、爰を出て野田・柴山・洗切などいふ所を過て阿久根に休、野田より爰までハ坂道なり、雲やぐ晴たり、爰ハ海邊にて、向ひに大嶋とて嶋ふたつあり、其嶋に鹿あまたすめり、又沖にハこしき嶋ミゆる、さつまのうち也、また沖の嶋山に雲のこりたる詠めいと面白し、ミヤこよりハ八重のしほ路をへたてたりしあらき海上の詠めなれば、光祖卿のミたまハ、さそめつらしう思ひたまふらんと思ひ出ぬ、

ミせはやな思ひ出るそミヤこ人

あらいそへのけふの詠めを

(付箋)

「行て見は猶いかならむ情しる

君かこと葉のかゝるなかめを 光祖」

爰を出て坂道を行、海ハ右にミゆる、耆里半行ハふすもり口とて海上の詠めいとよし、空よく晴たり、爰を過て耆里半行ハ西方といふ飯屋あり、今宵ハ爰にやとる、爰も海邊にて海上の詠めいと珍らし、

九日、あさくもりたれと耆里餘行ハ晴たり、湯田峠・麦の浦越とて坂道也、道あし、終平・高城・東の口なんといふ所を過て川内川とて大河あり、舟にて渡す、三丁ほともあるへし、此川しにも新田八幡宮の大社あり、爰より半里をへたつ、けふハ立もよらす心の願ひをかけて、

国まもる神に願ひをちかひつゝ

たみやすかれと猶祈るそよ

向田といふ所に飯屋あり、しはし休む、又川下にねこたけとて川にのそミたる山あり、昔し秀吉公九州入の陣所といひつたふ、爰を出て薩摩山とて昔し八坂道きうなりしか、今ハ坂さもあらず、此山を出れば五反田といふ所に至る、爰を過て壱里餘行ハ市来の湊といふ所に飯屋あり、爰にやとる、爰も海邊にて、はてかきりなき海上の眺望いわんかたなし、

海原や雲につらなるかきりあれや

なミに入日の詠め多ならぬ

十日、爰を出れば海邊にて吹上を行、半里餘行ハ妙見嶽とて坂道なり、爰を過れハ下り道はなたらかにくたる、苗代川といふ所に行て休む、此一里ハ朝鮮人の子孫なり、昔し秀吉公の命によつて朝鮮に渡る、帰朝の時朝鮮人男女をつれ来る、其子孫今に朝せんの國風をミたさす住ぬ、又つるの舞・かめの舞とてまひをもふ、はななくた古風にしていと珍らし、又女子ハ彼國のうたをうたふ、是も古風なり、爰を出て壱里行ハ伊集院といふ所に至る、けふハかこしまにく日なれと、日合あしければ爰にやとりぬ、

十一日、けふハ鹿兒嶋につく日なれと、道近けれハ日の出る比立出ぬ、五本松といふ所を過て横井といふ所に休む、こゝにて湯あひ、かミなどとりあけ、ひるかれひし侍りて、こゝを出れば并木松の道を行、鬼か谷といふ所を過て水上坂とて下り坂あり、きうなるさかなり、爰をくたりてしはし休、供のよそほひして午の時過る比鹿兒嶋城に帰りつきぬ、

御羈旅長途之紀行よくそくしるし給ぬ、ことにとりくこのことの葉かへすく誦しあまりに、

とりくこの言のはくきの

つゆのたまみかくひかりを

めてくこそ見れ

光祖

(さきやま たけふみ 学芸課学芸専門員)